

ブラジル日系移民小説論

守屋，貴嗣

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化．論文編 / 異文化．論文編

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

133

(終了ページ / End Page)

156

(発行年 / Year)

2011-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007179>

ブラジル日系移民小説論

守屋貴嗣

MORIYA Takashi

日本人の海外集団移住は 1868 年ハワイへ 153 名が渡ったのが始まりである。それから 30 年以上後の 1899 年、ペルーへの 790 名の渡航を最初に南米への本格的な集団移住ははじまる。ブラジルへの集団移住は 1908 年、791 名（契約移民 781 名、自由渡航者 10 名）^{（註1）} が乗船した笠戸丸がサントス港へ入港したのが最初であった。笠戸丸がサントス港に着いたのが同年 6 月 18 日。この日が現在「移民の日」として記念日になっている。

第一次世界大戦後日本に訪れた不況は、農村部では深刻で、1918 年には米騒動が起き、不況は慢性化していった。1923 年には関東大震災が発生し、1929 年には世界恐慌が起きる。失業者が溢れ、こうした余剰労働力が国策としてブラジルへと送り出された。不況を反映して移民は 1925 年から増え始め、戦前にブラジルで移民受け入れが中止される 1941 年までの 16 年間に全移民の 3 分の 2 が入国している。

第二次世界大戦以前の海外移民政策には、ハワイ移民に見られた出稼ぎ移民の送出から、満洲開拓移民に見られた傀儡国家の建設による永住への大転換があった。第二次大戦前のブラジル移民 19 万人は、ハワイ移民 15 万人、満洲移民 22 万 5 千人と並んで数的にも重要である。ブラジル移民は、ハワイ移民と満洲移民の狭間の時期にあたる。それまでの移民政策と根本的に異なるのは、ブラジル移民は「1 家族

3人以上の労働力」があることが条件であったことである。その条件を満たすため、擬制家族や便宜的な養子など「構成家族」としての渡航が多かった。移民たちの意識としては、ハワイ移民と同様に出嫁ぎ意識がほとんどであり、「10年で1万円」の資産を持って、故郷に錦を飾ることが合言葉のように存在していた。

敗戦後移民政策が再開され、日本からの移民とその子孫は現在では150万人とも言われている。1990年の入国管理法の改正をきっかけに、ブラジル日系移民二世、三世の来日が相次ぎ、日本への「デカセギ」就労者は30万人とも言われている。2008年には「ブラジル日本移民百周年」を記念して、日本とブラジル双方において移民を巡る様々なイベントや式典が実施された。ブラジルでの盛り上がりとは対照的に、日本では日系移民に対する興味、関心は低調であったと言えるだろう。2010年9月末には日本航空のサンパウロ直行便航路も廃止となった。しかしそんな中でも「デカセギ」就労者の家族を描いた、辻井南青紀『ミルトンのアベリャ』（講談社、2006・1）といった小説が生まれている。また、ブラジル日系移民の日本語作家である松井太郎の小説選集^(註2)も発行されている。

本論では、ブラジルを舞台としブラジル日系移民を題材として取り上げた内地日本人作家によって書かれた小説作品について論じていく。具体的には1930年に移民としてブラジルに渡った経験をもとにして作品を描いた石川達三『蒼氓』と、1977年3月と9月の2回ブラジルに滞在し調査を行い、長編小説を書き上げた北杜夫『輝ける碧き空の下で』を中心に取り上げ、論じていく。

I

石川達三の『蒼氓』ほど完成までの産みの苦しみというものを感じさせる作品も滅多にないと思われる。1932年、石川は自らの「南

米体験」を題材として「百枚くらいの原稿」をまとめた。それを中山義秀に読んでもらい、「考え直す必要がある」と評される。翌年、移民収容所から神戸出港までを「百三十枚くらいの長さ」の小説に書き直し、「蒼氓」と題して、雑誌『改造』の懸賞小説募集に応募する。その際、芹沢光治良に読んでもらい、「たいへん面白く拝見した、殊に終わりの方がよかった、ぜひ応募なさい」と激励されている。しかし応募の結果は「選外佳作」であった^(註3)。さらに翌年、大阪で発行されていた同人誌『旗』の求めに応じて加筆し、原稿を送付したが、『旗』は作品掲載の直前に廃刊となってしまうため、「蒼氓」は活字にならなかった^(註4)。その後、『新早稲田文学』の同人たちによって創刊された同人誌『星座』の編集責任者であった中村梧一郎が石川に無断で創刊号（1935・4）に掲載してしまう。ところが、この『星座』への掲載によって、新たに創設された芥川龍之介賞の受賞対象作品となり、見事に第1回受賞作となるのである。『文藝春秋』に転載されたのが1935年9月号。これに1939年、第二部「南海航路」、第三部「声無き民」が『長篇文庫』に連載され、同年8月に新潮社から「昭和名作選集」の1冊として、単行本『蒼氓（三部作）』が刊行され、ようやく完結する。石川が移民としてブラジルに渡ってから、実に10年の歳月が経っていたのであった。

石川が実際にブラジルへ移民として渡航するために神戸港へとやって来たのは、1930年3月8日、満24歳の時である。第1回移民船である笠戸丸渡航から20年以上経過していた。その折の情景は、旅先より雑誌『国民持論』へと送られ、連載された紀行文「最近南米往来記」の冒頭部に次のように書かれた^(註5)。

神戸港は春雨である。細々と煙る春雨である。

この港町の山手へ、坂道を幾台となく自動車が駆け上って行く。五六人の家族とその家財道具とを積んで。その道の極まる

所に黄色いビルが立っている。トアホテルの隣、松と赤土とに
囲まれた一角、ここに「国立海外移民収容所」が立っている。

神戸港は細雨 蕭条^{しょうじょう}である。荷物と一緒に自動車を下りた人々
は、この丘に立って故郷の山河を思い出す。

この「国立海外移民収容所」に来るまでの石川には、移民たちの
憂鬱など思い至っていなかったように見受けられる。それは「旅の興
趣は目的に縛られないことによって数倍する。という放浪哲学に基い
て、スーツケース二個を背負って、労働服を着て、移民船に乗った」(「発
刊について」『最近南米往来記』)というのがブラジル渡航の動機であ
ったと記されていることからもうかがい知れる。しかし、その「放浪
哲学」は日本各地から収容所に集まってきた人々を見ると、次のよう
に変化した。

小雨の降る寒い日だった。バラックの待合室の中は人いきれ
とみじめさで、居たたまれなかった。私は雨の中にひとり出
て行き、赤土の崖のふちにうずくまり、だれにも顔を見られな
いようにして、しばらく泣いていた。私はこれまでに、こんな
に巨大な日本の現実を目にしたことはなかった。そしてこの衝
撃を、私は書かなければならぬと思った。これを書くだけの力
はない。しかしいつの日か、何とかして書かなくてはならぬと
思った。(註6)

「国家が養い切れずに、仕方なしに外国へ奉公にや」られる人々の
発見は、ブラジル出発前の石川を打ちのめしたようである。しかし、
移民という名の「棄民」の実態を知り、「国家組織の不備」や「国家
の無力」を切実に認識していくのは、移民たちとともにいた1ヶ月半
にも及ぶブラジルへの船旅と、2ヶ月ほどのブラジルでの生活体験の

後のことであろう。

石川は、次兄悌次郎の関係から知り合った、米増寛の助力を得て、渡伯することになる。『移民講座第二巻 南米案内上ブラジル篇』（十藏寺宗雄編集者代表、日本植民協会、1932・6）には、「第六 移民の申込及渡航手続」、「第七 ブラジル移民の旅費」、「第八 移民の支度と種々の心得」など、ブラジル移民に対して詳しい条項が記載されている。石川は、日本からブラジルまでの船賃「三等 200 円」の補助金が出る「政府補助単独移民」として、らぷらた丸に乗船し、渡伯するのである。

しかし、ブラジルに到着し、「サント・アントニオ農場」にコロノ（契約移民）として入植したのも束の間、1ヶ月余り経った時には「嫁もらいに日本へ帰って来るという口実」で農場を去る。その後しばらくサンパウロに滞在し、リオデジャネイロを経由し北米をまわって日本へと帰国している。こうした行動を見ると、いかにも放浪とすることが出来る「目的もはっきりしない」旅であったことがわかる。しかしこの旅行が紀行文としてまとめられ、雑誌社に送られるという過程を経ていく中で、石川が回想し反芻するうちに、それは変質していくことになる。

木村一信は「石川達三「蒼氓」論——〈棄民〉を目にして」^(註7)において、自由気ままな出立をしたようでいて、石川の目は移民たちの「悲しき存在」としての「現実的一面」を見て、「涙ぐましい心」をもって移民たちに共感を寄せていくことになると指摘し、「日本は、移民を出さぬことを考えねばならない。移民の多いことを以て誇ろうなどとはもってのほかだ。移民を出さぬだけの用意、社会と国家の改良を、一刻も早く実行するがいい」との『最近南米往来記』の一節を引用しながら、小説『蒼氓』との記述の変化を「落差」として指摘し、論じている。本論では木村の指摘を考慮しながらも、「落差」に目をむけるのではなく、どちらの作品にも共通して描かれている部分、共

通して題材に選ばれている部分に注目しながら論じてみたい。

前述した『南米最近往来記』冒頭の部分は、『蒼氓』では次のような記述になっている。

一九三〇年三月八日。

神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのように暗い。

三ノ宮駅から山ノ手に向う赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台となく自動車が駆け上って行く。それは殆んど絶え間もなく後から後からと続く行列である。この道が丘につき当って行き詰ったところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建っている。後に赤松の丘を負い、右手には贅沢な尖塔をもったトア・ホテルに続き、左は黒く汚い細民街に連なるこの丘のうえの是が「国立海外移民収容所」である。

『蒼氓』ではより細かく風景描写がなされていることがわかる。空間構造を描写しようという作者の意図が読み取れる。「国立海外移民収容所」は、全国各地の農村からの日本人が集まった場所である。はじめに「幾台となく自動車が駆け上って行く」が、ここで述べられている自動車とは、現在のタクシーのことである。『蒼氓』では続いて「三ノ宮駅に汽車が着くたび毎に、親子手を引きあい、荷物をかつぎ、ぞろぞろ下りて来るのだ。殆んど大部分の者が初めての自動車と言うものにためらいながら乗るのだ」と記述されている。タクシーは、都市部に存在する乗り物である。全国の農村から集まってきた人々は、汽車から降り、「国立海外移民収容所」向かう途中に初めて「都市」と出会うのである。

神戸の街を通り、移民となるべき人々は収容所に詰め込まれる。収容所で彼らはそれぞれの今まで属していた共同体から切り離され、等

質化される。人々は番号を付けられ、分類され、同一の基準によって検査される。例えば、移民の資格を得るためには「トラホーム」であってはならない。「トラホーム」という病が人々を区分する指標となるのである。

海野弘は「南米移民船の中の都市」^(註8)で、『蒼氓』における「らぶらた丸」船内の描写を「都市的である」としている。また、1920年代に船を舞台にした小説が多いかという理由として「船が集約された都市としての空間を持つようになったからである」としている。更に、実際のらぶらた丸設計者である和辻春樹の著書『随筆・船』（明治書房、1940・1）と『随筆・続船』（明治書房、1942・1）を引用し、欧米に負けないほどの豪華客船を造ろうとしていたことを指摘し、豪華宿泊施設としての「豪華客船」設計計画としている。確かに、船内での長期間にわたる生活を消費生活とするならば、都市生活の一端であると言うことも出来よう。実際に、農民であった彼らは船中において、配水管を詰まらせる、裸でシャワー室から船室まで移動する、などの「都市生活者」たり得ない問題を起こすことになるのである。

神戸港を出港したらぶらた丸は、45日間にわたる船旅であるが、途中、各都市に立ち寄っている。香港を出発した日、船内の食事はうどんと奴豆腐であった。

そこで、日本を思い出す夕食がはじまった。船は都会のようなものであった。東京のような、大阪のようなものであった。そこではあらゆる不便がとりのけられあらゆる便利が考案され、そしてどんな製造工業でも行われているけれども、ただ一つの原料も出来はしない。（『蒼氓』）

船内が「都会」であるとの意識が、ここでははっきりと述べられている。リトル東京、リトル大阪といった様相の船中には、生産民と

なるべき農民たちが満載されていた。

前山隆は「日本でうどんを食べると食欲の問題なのに、ブラジルで食べると郷愁の問題とされるのはなぜか」^(註9)と問題提起をしているが、ブラジルへ向かう過程である船中においても、うどんは郷愁を引き起こす食べ物であった。

 ヴィの向うに船が浮いていた。マストには日本郵船会社のマークがあり、船尾に白ペンキでりおん丸と書いてあった。日本の船がサイゴンにいた……それで移民たちは『国際関係』というものをふと考えてみた。(『蒼氓』)

「倉庫の入口に立って身動きもならぬほど詰まっているお百姓達」と記述されていた農民たちは「移民たち」と表記されることになる。ここで言う「国際関係」を考えたときとは、日本と他国の関係ばかりではなく、日本と自分、移住先であるブラジルと自分との関係も考え合わせたときであろう。そのとき「お百姓」は「移民」になるのである。船旅が1ヶ月近くなると、船中の移民たちはつまらないことで揉め事を起こすようになる。そこで、会社から派遣された移民監督・村松は、人々の「無聊」を慰めるために様々なイベントを開催する。一番大がかりなものは「演芸大会」であった。この「演芸大会」については、『最近南米往来記』ではほとんど記述されていない。だが『蒼氓』においてはブラジル到着前の作品の山場として、準備段階の時点から詳しく記述されている。

この演芸大会は移民たちの不満を解消するために監督によって企画されたものであった。しかし、船内の移民たちにとっては一大カーニバルであったとすることができるだろう。「都市」におけるエネルギー発散のための祝祭であった、と解釈することも可能であると言える。「学芸委員」が選ばれ、デッキに花道が作られ、「ら・おらた丸さん江」

と染め抜いた幕まで張り出される。そのような船中で都市生活者として規制され、萎縮していた移民たちは、演芸大会というカーニバルで一挙に活気づく。そこで表面化してくるものは、規制されることで無くなるかに見えた日本、古くから受け継がれてきた農村的な日本である。剣舞、漫才、安来節、尺八、三味線、民謡、八木節踊り、おけさ踊りが出し物として催される。外国では馬鹿にされるから洋服を着なければならない、と言われていた人々が、花笠と赤い袴がけで踊っている。この演芸大会の後、それらを見ていたパーサーは次のように述べる。

「ブラジルの田舎へ追い込んでしまうのは惜しいものだね。東京の寄席へ出しても食えるような芸人ばかりだ」と言った。（『蒼氓』）

ここでは「ブラジルの田舎」と「東京の寄席」が対比されている。ブラジルに対して優越感をもって描かれていると言えよう。また、八木節など日本の古い芸能は、ここでは都市的なものとして描かれる。パーサーの意識では、移民たちは日本の農村からブラジルの農村へ、という移動を経ている「農民」としてではなく、東京という「都市生活者」がブラジルへと追放されたと考えられているのである。

らぶらた丸はいよいよリオデジャネイロに到着する。美しい海岸と高層ビルという「都市」が船から眺められる。しかし、移民たちはここで上陸することは許されない。リオから南下し、河口に入り、サントス港で初めてブラジルに上陸が許されるのである。サントス港からサンパウロまで、移民たちは鉄道で運ばれる。移民専用列車に詰め込まれ、外から施錠され、荷物のように運搬される。サンパウロ郊外の移民収容所に再び彼らは、今度は本当の意味で「移民」として収用されるのであった。ここで移民会社の係員は、移民たちを分配し、行

き先の農場を決定する。移民たちはそれぞれ別々の汽車に乗せられ、それぞれの労働先である農場に振り分けられるのである。

ブラジルに到着してからの移民たちは、出来るだけ「都市」から遠ざけられる。リオデジャネイロという、世界有数の近代都市に移民たちは上陸することを許されない。さらにブラジル第二の都市であるサンパウロにおいても、郊外の移民収容所に閉じ込められ、殆ど街に立ち入ることは出来ないのである。

『蒼氓』という作品は、第三部「声無き民」において、佐藤夏の一家が移民としてこれから働くコーヒー農場に到着し、コーヒー収穫の初仕事に向かう朝で終わっている。この作品の空間的移動を辿てみると、農民たちは自分たちの住んでいた村、総じて「田舎」から神戸という都市の収容所に集められ、船で長期間移動し、サンパウロの収容所に入り、ブラジル奥地へと散らばっていく。つまり、移民たちは「都市」を経過してはいるが、神戸やサンパウロは通過しただけであり、「船」は疑似都市であり、日本と対比して「田舎」とされるブラジルの、しかも奥地へと押し出されていく。結果としては、日本の農村から、ブラジルの農村へと移動したことになる。しかし移民たちは「田舎」へ行くにも都市を経過しなければならない。政策側としては村から村へ、という直接的な移動が望ましいであろう。しかし、移動をするということは、村から、都市を通過して、村へという過程を経なければならない。近代社会において、「農民」が「移民」になるためには、「都市」を通過するという過程を経なければならなかったのである。

『蒼氓』という小説は前述の通り、ブラジル奥地のコーヒー農場に着いたところで終わっているが、『最近南米往来記』は次のように続いている。

（急行列車は山間の小駅を小石の如く黙殺した。）そしてひた走りに南下した。午前五時カンピーナス。乗り換えてから三時間、

徐々に、都会の郊外が展開されて来る。

サン・パウロ！

これは田園の一ヶ月の間、幾たびか夢に結んだ都市である。
東京生活者がせめての慰めに望んだ東京^{おもかげ}の俤である。

新感覚派の旗手、横光利一の「頭ならびに腹」のパロディのような文章である。モダニズムの隆盛とともに描かれていく都市、都市を描くべき手法としての新感覚派のパロディが使われているのである。この『最近南米往来記』において石川は、「一、俺はどこの国にでも住めることが解った」（「発刊について」）と自らのコスモポリタン性を発見したことから記述を始めている。そんな石川の文章は次のように続いたのであった。

都会である。人間が動いている。世界と一緒に動いている。ラジオが放送される。流行が転化を続ける。ツェッペリン飛行船が訪問する。四十三階のビルが建つ。自動車の洪水だ。シネマもジャズも動く。恋が大っぴらに語られる。サン・パウロ。これは都会である。人口百十万の都会である。（『最近南米往来記』）

石川は都市としての日本と、「田舎」としてのブラジルとの対比を行った。しかしブラジルにも前述のように都市は存在する。その「都市」を過剰に描くことによって、日本人「移民」が送り込まれた地域を「田舎」として強調しているのである。

II

石川達三の『蒼氓』は、ブラジル日系移民についてのイメージを

決定的に形成したと言えよう。それは「移民」とは地方の農村出身の貧農民たちであり、移民たちが送られた先はブラジル奥地の「田舎」であるというイメージである。そして「移民」は「棄民」であるという悲惨さを伴ったイメージであった。「この作品が有名になっただけに、当時の移民の暗いイメージが“定着”してブラジル移民につきまといってきた」と石川と同じ「らぶらた丸」で渡伯した内山勝男は述べている^(註10)。実際に、第1回笠戸丸移民だけではなく移民一世は、生きていくためにかなりの苦勞を強いられたのであり、その事実は多くの資料や歴史書にも記されている。『移民の生活の歴史——ブラジル日系人の歩んだ道』（サンパウロ人文科学研究所、1970・6）の著者である半田知雄も「ブラジルの日本人移民が、自分が棄民であるということを強く意識したのは、はじめてブラジルの土を踏み、移民会社の募集宣伝と現実とのあまりの違いに驚いたときと、戦争のとき置き去りにされたときです」と述べている^(註11)。さらにそれだけではなく、日系移民小説としての『蒼氓』の影響である。それは、農村と都市という対比の構造化であり、ブラジル日系移民を扱った多くの小説にその系譜は引き継がれている。

西成彦は「カボクロ問題」を中心的な議題として取り上げながら、「ブラジル女性の肉体美と早熟を語るべくして、日本人、日系人の異性関係をことさらに強調する一群のブラジル物」^(註12)として、北杜夫の『輝ける碧き空の下で』の、国士館高等拓殖学校第一回生・木内喜一郎が、日雇いカボクロ（原住民）たちの監督であるゴンザレスの娘・カロリーナとの愛欲の場面と、ジュート（黄麻）栽培の監督である辻小太郎の妻がカボクロ男性と服毒心中をしたとする場面を引き合いに出しながら次のように述べている。

このような物語やゴシップの堆積が、内地人の書くブラジル小説では、安っぽい旅行記文学の枠組みのなかで濫用されてし

まう。戦前にはほとんど根づくことのなかったブラジル賛美の風潮が、戦後日本のメディアでは、カーニバルのイメージを核にして、ブラジル女性の肉体美ばかりを強調する形で一般に流布した。こうしたなかで、ブラジル日本人にとっては生き残るための選択肢であった「カボクロ」との性的な関係が、単にブラジルの誘惑の強さを語るためだけの小道具として引き合いに出されることになるのである。

確かにブラジルの女性像として、目鼻の彫りの深いエスニックな顔立ちと豊満な肉体、色黒の肌、ラテンの陽気さと大胆さ、奔放さをもって描かれることが多い。それらは日本内地にはない、セクシャルな要素として認識される。日本人と原住民の間に結ばれた性的な関係は、日本人社会の閉鎖性によって隠蔽されるか、あるいは否認される。そうでなければ暗黙裡に、あるいは公然に日本人社会から排除される。同化、さもなければ排除という日本社会特有の対処法である。戦前の「外地」日本人居住者たちと原住民の間に起こったことが、ブラジルでは日系移民と「カボクロ」との関係として表現されたと言えよう。ブラジルという国において、日系移民たちの身体や心の中にどのような事柄が刻み込まれて行ったのかに対して関心を抱きつつも、「謎」は「謎」のままに明確化しないことによって成立しているのが内地人作家の描くブラジル小説であろう。

このような「現地妻」問題は日本の敗戦によって封印された。日本人の現地化とは、「土人化」ではなく「同化」のコースを辿った。ブラジルにおいて「土人化」とは「カボクロ化」のことであり、この問題が日本人の間で切実な問題として存在したのが南米の日本人社会であった。日本人社会では「われわれ」か「彼ら」という分類法であり、「彼ら」とは「外人」であった。「外人」は西洋人でもブラジル人でも中国人、韓国人でも「外人」である。カボクロもブラジル人として「外

人」であるが、そこには二重の差別的な視点が含まれている。土人化つまりカボクロ化は、ブラジル日本人社会においては、社会性の放棄、コロンビアからの脱落として認識されたのである。これらの問題を小説の「小道具」として処理しようとしたのが内地作家の描くブラジル小説であったと言えよう。

だが内地日本人作家においては「カボクロ」問題だけではない、「カボクロ」を一つの象徴としてブラジルという国全体を「田舎」として描くことが行われていく。北杜夫の『輝ける碧き空の下で』は、醍醐麻沙夫の『森の夢』に多大なる影響を受けて執筆されたとしている^(註13)。醍醐の『森の夢』は、副題として「ブラジル日本人移民の記録」と付され、登場人物たちに実名を用い、平野運平を中心として、身近にいた植民者たちの群像を明らかにする意図をもって書かれている。クライマックスは「平野植民地」となる原始林の開拓の場面である。ちなみにブラジル移民史で使用される「植民地」とは、帝国による侵略によって生み出される土地のことではない。自作農集団が開拓した土地のことであり、「植民者」とはその「植民地の人」との意味である。植民地に入ることを「入植」と言い、入る人を「入植者」と述べる。日系移民たちは、自分たちの土地として「植民地」を拓こうとしたのである。

人智を超えた自然の驚異、医者もいないような土地の開拓における苦難、ブラジルという国の広大さと美しさが『森の夢』では描かれている。未開の地としての「田舎」が描かれているのである。例えば、平野植民地での最大の悲劇であるマラリアによる多数の犠牲を救うために、特効薬とされるキニーネを手に入れるための場面である。

翌日、留守中のことを弟の彦平や外語の後輩の畑中仙次郎たちにくれぐれも頼んで、運平はサンパウロへ行った。

サンパウロの薬局でキニーネの値段が高いので驚かされた。

三百人の治療と予防に必要な量は、彼が携えて来た金額ではまるで不足だった。あちこち奔走し、州農務局から大ビン一杯のキニーネを寄付して貰えた。松村総領事も話を聞いて大いに驚き、医術の心得のある者を至急派遣すると約束してくれた。

キニーネの白い粉末が詰ったビンを大事に抱えて彼がペンナ駅に帰り着いたのは一週間後だった。（『森の夢』）

実際に平野植民地はノロエステ鉄道奥地のドラーダ河一帯に広がる湿地帯に造られた。それは日本的な見解では、稲作に向いている「良質な地相」であったからである。平野植民地に移り住んだ人たちは清流が流れ込む一帯に仮小屋を建て、動こうとしなかった。ブラジルの自然の中で「湿地帯」に住むということがどういう結果を招くことになるか、何の知識も、誰も持ち合わせていなかったのである。次々にマレット（マラリヤ）の犠牲になり、最初期は火葬の煙が立たない日は無かったほどであったという。前述の引用文を見ると、サンパウロという都市は、その名が記されるばかりで街の風景が描写されることはない。そして移民たちが実際に生活している平野植民地が、サンパウロからいかに遠い場所であるか、都市に出るのがいかに不便であるかが強調されている。「田舎」を描くことでその反面としての存在である「都市」を意識させていると言えよう。

この『森の夢』は200頁ほどの中編小説であるが、北の『輝ける碧き空の下で』は第一部、第二部（文庫本では4冊）として書かれた長編小説であり、登場人物も数多く、当然都市部で生きることを決心した人物も描かれている。代表的な人物は沖縄出身の金城山戸と儀保蒲太である。彼らは第1回移民船笠戸丸に乗船し、渡伯してきた実在した人物たちである。儀保蒲太は通称イッパチと呼ばれ、結核を患い、若くして亡くなったが、金城山戸は1988年まで長生きし、「第一回移民の生存者たち」として記事にも取り上げられている（註¹⁴）。

山戸のほうが年長で頭もよかったから、二人して仕事を捜そうということになった。いちばんいいのは家庭奉公である。しかし、二人とも新聞広告も読めないの、日本人がかなりいるモッカ区から離れて、なるべく立派な家の立並ぶ界隈を闇雲に捜すことにした。道路の右側を山戸が、左側をイッパチが歩いて、一軒々々の家のベルを押し、

「仕事はありませんか？」

と頼んでまわることにした。(略)

このほとんど一日じゅうかかった職さがしは、とうとう報いられた。

金城少年は、アウローラ街のドットール・アルツール・アルベス・フレイラという歯科医の診療所で雑務係に雇われた。イッパチのほうは、サン・ベント街にあるオートモベル・クループの賭博場で職にありついた。(『輝ける碧き空の下で』)

サンパウロで2人の少年が職探しを行う場面である。サンパウロという大都市においては、街の名前を記さなければ2人がどこで活動をしているのかわからない。だが、そこで都市の風景が描写されるわけではなく、道路の右側、左側、「一軒々々の家」と記述されるのみなのである。そして2人が就いた職業は、歯科医師と賭博師であった。どちらも都市でなければ成り立たない職業である。これは物語上のフィクションではなく、2人とも実際に就いた職業であった。イッパチはブラジルの賭博界では有名になり、自分の店も持つほどの賭博師となった。金城山戸は日本人初の歯科医師としてサンパウロ市の上流階級の信望を得る歯科医師となった成功者なのである。『輝ける碧き空の下で』では、このようにブラジルの奥地で開拓する、あるいは広大なコーヒー農場での収穫を行う契約移民としての農業労働者ばかりで

はなく、都市生活者としての移民の姿も描かれている。

また北は積極的意識を持ってブラジル移住した人物も描いている。前出の国土館高等拓殖学校の生徒たちは、出稼ぎ目的の移民ではなく、あくまでも未開の土地であるアマゾンをも自分たちの手で開拓しようとする「熱誠と信念」を持って渡伯している。

出稼ぎ根性の一般移民と違い、高拓生たちは初めからアマゾンで骨を埋める決心で渡伯した特殊な集団であった。彼らはアマゾンに新日本を建設しようとする上塚司校長の理想主義の教育を受け、またどちらかといえば裕福な家庭の息子たちであったから、それだけ世間知らずで我儘で、(略)怠け放題だったり、ずいぶん出鱈目をやってきた連中だった。しかし、もともと狭い日本を脱出して新天地を開拓しようという気迫を持った若者たちであった。(『輝ける碧き空の下で』)

日系移民の歴史を辿ることは、「棄民」に通ずる悲惨な苦勞譚に数多くぶつかる。しかしそればかりではなく、成功譚も存在する。そして、未開地の開拓というフロンティア・スピリットを有した開拓者も渡伯したのであった。北は「或る一世の方は、「ブラジルには月とスッポンとがいます」と強調した。これは金持と貧乏人とを意味するだけでないことがやがてわかってきた」(「あとがき」文庫本第二部・下)と述べているが、大言壮語を述べる躁的な感覚の人と鬱的な絶望感を持つ人とが存在するということだろう。『輝ける碧き空の下で』では、山口佐吉と佐久間四郎というキャラクターにあてはまるだろう。故郷に錦を飾るほど大成功はしていなくとも、結婚し、家族を持ち、自分たちの生活基盤を安定させ、日本に暮らす家族に仕送り出来る程度の成功を取めた者は多かった。ブラジルは安定した生活がある国という対象であったからこそ1937年まで戦前の日系移民の数は増え続ける

のである^(註15)。その意味で、『輝ける碧き空の下で』は『蒼氓』によって日本人に決定的に印象づけられてしまったブラジル日系移民イメージに対する挑戦でもあった。

小説は主要登場人物である佐久間四郎一家が、特務機関を名乗る五木大尉の帰国詐欺に易々と騙され、一家を挙げて帰国するため、ブラジルでの資産を全て二束三文で売り払い、来るはずのない帰国船を待つ場面で終わる。

実際に帰国詐欺被害にあった人々は多数存在した。何故それほど多くの被害者がいるのか、現在の私たちには理解することが難しい。第二次世界大戦敗戦直後のブラジル日系社会における「勝ち負け抗争」の騒乱の中で、臣道連盟に代表される勝ち組も時が経つにつれて敗戦を知る。しかし勝ち組の精神構造は容易に変化するものではなかった。遠い外国の地で日本の「戦勝」を支えた移民たちを天皇の使者としての軍事使節団・慰問使節団が迎えにやって来る、その船へ乗船し戦勝国日本へ帰国することが天皇の御子としてブラジルで苦勞されたあなた方に特別に許された、というものである。その「天皇の船」が入港したというデマが流れるたび、土地や財産を処分して移民がやって来たのであった。精神的に「戦勝派」の人々をターゲットに出没した「円売り」や帰国詐欺は、1950年代に入り朝香宮事件（ニセ宮様事件）や桜組挺身隊事件（「朝鮮派遣国連義勇軍」参加事件）となって、「戦勝国」日本への帰還をめぐる戦勝派の心情を巧みに欺く形で続いたのである。

帰国詐欺に引っかかった旅立ちの前、佐久間四郎と妹・いととの会話は次のように記されている。

「あん頃は、マレットでずいぶん人の死んだねえ」

「うん」

「そっから、バッタの大群のきたり、霜害のあったり、雨のぜん

ぜん降らんだったり、ひどかこつばかり続いたねえ」

「そぎゃんだった」

「そぎゃんひどかときに、兄さんな、立派に働いてきたたい。わたしちゃんために、働きどおしだった。昭和になってからでん、サウバ蟻に作物のひどうやられたこつもあったでしょうがね。あんときも、兄さんな、負けんだった」(『輝ける碧き空の下で』)

佐久間四郎といとは熊本県出身の第1回笠戸丸移民という設定である。40年近くブラジルで暮らしながらも、熊本弁の抜けない「田舎者」として描かれているのである。熊本の農村からブラジルの奥地へと移民した者である。佐久間一家は、作品最後の場面では平野植民地からサンパウロまで車で出、何泊かした後サントスに出て安宿で宿泊しながら決してやって来ない日本への帰国船を毎日港へ行き、待っているのである。サンパウロという「都市」は、ここでも通過する場所として描かれているのであった。

III

大城立裕『ノロエステ鉄道』(文藝春秋、1989・11)は、沖縄出身の一世移民老女のモノログである。夫婦でブラジル移民募集に申し込み、笠戸丸で渡伯してきた第1回移民という設定である。あまりの酷い待遇に契約耕地から逃げだし、ノロエステ鉄道の「鉄道工夫」を10年間続けて、何とか生き延びた老女に対して、移民功労者として表彰されることになり、老女が思い出を語るというストーリーである。老女は夫を亡くし、エスペランサで暮らしており、「たった一度だけサンパウロに」行ったことがある。沖縄から移住し、ブラジルの奥地で生涯暮らしてきたという典型的な移民として描かれている。

三島由紀夫の戯曲『白蟻の巣』(新潮社、1956・1)は、三島が

1951年12月から朝日新聞特別通信員として世界中を訪問し、翌年2月にブラジルを訪れた際の経験を活かして書かれた戯曲である。舞台は「サン・パウロ市より空路一時間なるリンス郊外の珈琲園主刈屋義郎の邸宅」である。刈屋は珈琲園の経営が上手くいっている移民成功者であり、妻の妙子は爵位を持つ実家から嫁いだお嬢様育ちで、ブラジルの田舎で日常に退屈している。リオのカーニバルが近づいたため、歌い踊っているカボクロ（作中では作男）に対して、「あの人たちの生活は、私からは遠すぎるわ」と言い、日本での生活を懐かしんだりする。また、仕事でサンパウロに出張に行っている夫・刈屋義郎はサンパウロに「いい女」が出来たとされる。「ミス・サン・パウロ」で「飛切りの混血美人」である。日本とブラジル、サンパウロとリンスという対比は、そのまま都市と農村の対比にスライドされている。

角田房子『アマゾンの歌』（毎日新聞社、1966・11）は「日本人の記録」という副題が付いているルポルタージュである。「三ヶ月の滞在の半ばを、私はアマゾン流域の取材に費やした」（あとがき）と記されているように、ブラジル北部のアマゾン流域に暮らしている日系移民に取材し、彼らのアマゾン開拓時の苦労を書き記している。西成彦が指摘するように、角田にとってアマゾン流域という熱帯雨林は南方への進出や太平洋戦争の主戦場となった地域と列なっており「とりわけ無関心ではいられない格好のブラジルの素材であった」^{（註16）}と言えよう。そこにはサンパウロやリオでの都市生活者は登場しない。

岡松和夫『異郷の歌』（文藝春秋、1985・6）は、サンパウロにある日本語新聞社に勤務する男性・小森と、1960年に芸大を卒業後サンパウロに渡伯した画家・安岐が主人公である。ともにサンパウロ在住という設定であり、サンパウロ在住の日本人や日系移民たちとの交流が描かれる。新聞記者と画家という、「都市居住者」としての職業設定である。

金子きみ『ブラジルの霜』（家の光協会、1978・4）は、戦前にブ

ラジルに単独移民し、それなりの成功をした兄を日本で生活していた2人の妹が訪ねて行く、という筋書きである。時代設定が移民70周年を直前に控えた1975年頃であり、その頃の日本とブラジル両方の風俗や流行が随所に出てきて、日本以上に日本的だといわれるコロニア（植民地）を描いている。主人公の姉妹の視点で描かれるのはブラジルの広大さ、奥深さである。作者の金子きみは自身も北海道開拓入植者の娘として生まれている。自身の周囲にブラジル移民となる人々が多かったそうである。広大な農園やそこで働くカボクロやカマラーダといった人々が描写されている。

上記に挙げたような文学作品以外の大衆文学においても都市と農村の対比という構造は変わらない。

麻野涼『天皇の船』（文藝春秋、2000・10）は、ブラジルと東京で起こった殺人事件の真相を日系移民二世の吉田マルコスとマダレーナというカップルが解き明かしていく物語である。日本敗戦直後の「円売り」詐欺のため、家族を殺された双子の山際兄弟の復讐により次々と殺人事件が起こるのだが、山際兄弟はブラジル警察も手を出せない「死神部隊」のリーダーである。また、真相を突き止める吉田とマダレーナの2人は、聖州日日新聞記者と有名雑誌『エスタード』記者という設定である。

船戸与一『山猫の夏』（講談社、1984・8）は、二・二六事件に関わった軍人を父に持ち、クーデターの当日に生まれ、後に移住したブラジル育ちの準二世「山猫」が主人公である。彼は戦中から戦後にかけてブラジル日本人社会の混迷をくぐり抜けた人物であり、その後突然姿を消し、30年近くを経て1人のゲリラ活動家として渡伯日本人青年の前に出現するのである。渡伯日本人青年はヤクザ者との喧嘩に巻き込まれ日本に居られなくなったという設定である。義理の叔母が経営する飲食店で、バーテンダーという夜の職業に就かせることで都市生活者として描いている。都市生活者であるための職業は、芸術家、

新聞記者、夜の仕事、そして自営業である。

垣根涼介『ワイルド・ソウル』（幻冬舎、2003・8）は、親子で経営する野菜市場の大元締めとして設定されている、衛藤と養子のケイ。もう1人の登場人物・松尾はコロンビアのマフィアのドンに育てられた跡継ぎである。ともに戦後移民として渡伯し、家族を殺され、想像を絶するような目に遭い、手を組んで日本政府と移民会社に復讐していく物語である。ケイと松尾の超人的な行動により、復讐は達成される。

南米に育った日系移民が、何故に「怪物化」したかについては謎のままにしておき、その謎めいた変相後の姿を誇張的に、過剰に描くことで一個の日系移民の神話を作り上げていくという作品における構図。ブラジルという「田舎」は、その巨大さも手伝って、移民を都市生活者の理論では理解不能な「神話」の発生地として存在させたのであった。こうしたブラジル日系移民をめぐる内地作家による過剰なる「田舎」の描き方は、ブラジルで日本人の身体や心の裏側に何が刻み込まれていったのかに強い関心を抱きつつも、謎そのものは不問に付すことによって初めて成立している。「田舎」への憧憬と潜在的な恐れ。それが内地作家の描いたブラジルであり、ブラジル日系移民小説であった。

註

- (1) 『日本ブラジル交流史——日伯関係 100 年の回顧と展望』（日本ブラジル修好 100 周年記念事業組織委員会、1995・10、51 頁）、高橋幸春『日系人その移民の歴史』（三一新書、1997・12、57 頁）などの記述を参照。しかし、丸山浩明「ブラジル日本移民の軌跡 百年の「大きな物語」」（丸山浩明編著『ブラジル日本移民——百年の軌跡——』明石書店、2010・7 に収録）には、「781 人の契約労働移民（165 家族 733 人と独身者 48 人）と自由渡航者 12 人」（113 頁）と記載されている。
- (2) 松井太郎『うつろ舟 ブラジル日本人作家・松井太郎小説選』（西成彦、細川周平編、松籟社、2010・8）
- (3) 石川達三「出世作のころ」6、7（『読売新聞』夕刊、1968・2・26、28）。
- (4) 浜野健三郎『評伝石川達三の世界』（文藝春秋、1976・10）、98～101 頁。
- (5) 『最近南米往来記』の引用は中公文庫（1981・11）より、『蒼氓』の引用は新潮文庫（1981・11）より行った。
- (6) 「出世作のころ」2、『読売新聞』夕刊、1968・2・20
- (7) 木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』（世界思想社、2004・4）収録、59～60 頁。
- (8) 海野弘『モダン都市周遊——日本の 20 年代を訪ねて』（中央公論社、1985・6）収録、60～62 頁。
- (9) 前山隆『エスニシティとブラジル日系人——文化人類学的研究——』（御茶の水書房、1996・8）、206～207 頁。
- (10) 内山勝男『蒼氓の 92 年——ブラジル移民の記録』（東京新聞出版局、2001・1）、79 頁
- (11) 藤崎康夫『母と子でみる ブラジルへ 日本人移民物語』（草の根出版会、1999・10）、111～112 頁。
- (12) 西成彦「ブラジル日本文学と「カボクロ」問題」（『くいま』を読みかえる——「この時代」の終わり 文学史を読みかえる⑧』インパクト出版会、2007・1）収録、77 頁。
- (13) 新潮文庫版の第一部下巻の「あとがき」には、「現在ブラジル在住の日本人作家の中で日本の雑誌にも寄稿している醍醐麻沙夫氏に案内され、日本人耕地としても特殊な弓場農場へ行き泊めて頂き、貴重な体験もした。醍醐氏はのちに「森の夢」（サンパウロ新聞社刊、その後、冬樹社刊）というすぐれた小説を書かれた。これは平野植民地についての、最初の克明なドキュメント小説である。平野植民地については他に少量の資料しかない

ので、私はこれを大幅に借用せざるを得なかった。また「森の夢」がすぐれた小説であるだけに、或る部分はその描写を乗り越えることができず、どうしても模倣してしまったというのが実状である。それを快く許してくださった氏に厚く感謝を捧げる」とある。

- (14) 同 (11) 収録、66～70 頁。
- (15) 『人文研』 No7 (サンパウロ人文科学研究所、2009・10)、55 頁グラフ参照。
- (16) 同 (12)、76 頁。